

穴太衆積十四代石匠 (株)栗田建設 代表取締役会長

栗田

AWATA
Junji

純司

さんに聞きました

二〇〇七年三月四日(日)
栗田さんのご自宅

古墳時代から始まる 石積みの技法

——穴太衆、穴太衆積と言って
も、「ご存知ない方もいると思いま
すので、まず簡単にご説明いた
しますか。

栗田——実際、地方へ行って穴太
と言っても「あなふと」と読ま
れ、「あのう」とは読んでもらえ
ません。もともとは古墳時代から
始まった石積みの技法です。この
坂本近辺にも古墳がたくさんあ
りますが、その両サイドの石積み
を見ると今まさにわれわれが積
んでいる穴太衆積といわれる石の
配置がみられます。その後、伝教
大師最澄が比叡山延暦寺を開祖
され、そこでの仕事に穴太衆積が

用いられました。

古墳の石積みというのは奥行
きがなく弱いので、どうしたら丈
夫な石積みができるかということ
で試行錯誤してでき上がったのが
現在の石積みです。それが坂本の
里坊の石垣などに残っています。
戦国時代になり、織田信長が比叡
山を焼き討ちにしましたが、石垣
を砕こうとしても容易に砕けな
い。そこで、安土城を築くときに
呼ばれ、築城の仕事が始まりまし
た。安土城の石垣で初めて穴太衆
が表舞台に出ることになりました。
以降、穴太衆が全国の各大名
に呼ばれ、築城に用いられまし
た。当時の城の八〇パーセント以
上は穴太衆が手掛けた城である
うといわれています。そして、穴
太頭は禄高をいただいて、武士の
扱いで各地に住みつくようにな
り、代々石積みを行い、修復工事

などに従事していききました。

石が行きたいところに 持っていく

——先代の栗田万喜三さんが非
常に有名な方で、石に聞いて石が
答えてくれたところに置くとい
うことが言われています。それは
どういうことなのですか。

栗田——私のところに伝わって
いる言葉で「石の声を聞け、石が行
きたいところに持っていけ」とい
うのがあります。先代もその先代
から教えられたと思うのです。私
が仕事をやり始めたのは二十二
歳のときからですが、一年くらい
したときに、湖東三山西明寺の仕
事がありました。そのときに私が
石を積んでいたのを見ていて「お
前、考えているようだけど、石に
聞けよ」と言うのです。「アホなこ

とと言うな、石がしゃべるはずな
いわ」と、当時は思っていました。
それからさらに一年ほどして「お
前積んでみい」と言われて積み上
げるのですが、積んだ石を見るな
りボールを持って砕くのです。ど
こが悪いか、何がいかんのか、全
然教えてくれない。「わしの仕事
を見ていたらわかる」と言うだけ。

それで見ていると、やはり石の持
つていき方が違うのです。親父が
「あの石をここに」というと、ポン
と合う。われわれが持つていった
ときは無理して無理して収めてい
るので、ものすごく違和感がある
のです。

それから十年、私が三十一歳く
らいのときに、安土城の天守台付
近の石積みを任されたのですが、
どの石を持つていこうかなと探し
ていると、ある石がものすごく目
につくのです。「ほな、あの石ここ

聞き手



溝淵利明
編集委員

持つてこい」と言っで運ばせてはめてみると、コトンと音がしたような気がしました。ああ、これかと。これが石の声というものかなと、そのとき初めて気がつきました。それから自分を抑えて、まず石に問いかけるような気持ちになってやってみると、積むスピードも変わり、無理をしなくても収まってく。ですから、三十一歳くらいからようやく小さいながらも声が聞こえたというわけです。以来、三十五年になります。まだまだ親父の域には達しないと思っています。



阪神淡路大震災にも耐えた穴太衆積

——日本は地震の国で、石垣を積むだけで長くもたせるコツはありますか。

栗田——穴太衆積では「二番持たせ」と言われています。二番というのは石の先端ではなく五センチくらい入った奥で合わせることをいいます。本来なら全体的にきちんと合えばいいのですが、自然石の野面ではそうはいきませぬ。なぜそういう積み方がいいかという、やはり先端で持たすと

地震などの場合、ずり落ちる可能性が大なのです。やはり二番でやっている余裕がある。

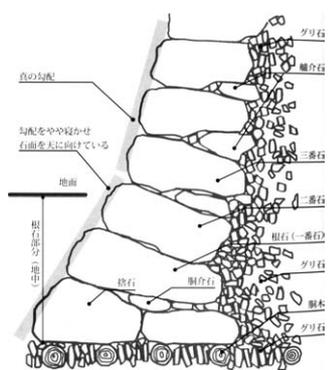
以前、兵庫県加西市の一乗寺で石積みを行って十二月中旬に帰ったら、翌月の一月に阪神淡路大震災ということがありました。あれだけの地震なので絶対に崩壊していると思いき、苦勞してお寺にたどり着き、和尚にお会いしたら、「よう来てくれた。いっぺんみてくれよ」と言われるのです。これはもう崩壊していると覚悟して積んだところにいったところ、まったく崩れていないということがありました。

第二名神高速道路の甲南トンネルの実験で、穴太衆積とコンクリートブロックによる擁壁を並べ、土圧をかけて擁壁の変位を測定する実験を行ったこともあります。穴太衆積は、石の表面よりも奥を大切にし、石垣の奥に栗石という小石を詰めています。その栗石で圧が吸収され、最終的に崩壊するには至りませんでした。実験が終わってから昔の人の知恵はたいしたものだと、改めて見直しました。

今、私は国土交通省の砂防フロ

ンティアの委員になり、石積み堰堤の文化財保護の仕事もしています。最近では、建物と石積みを組み合わせると面白いということで、滋賀県では建物をつくったなら、その裾周りを穴太衆積で積むということをやっています。自然のものを使うということで、建物も見た感じが落ち着きます。そのように、公共的な建物でも今、少しずつ穴太衆積が広がっているとこるです。

——本日は貴重なお話をありがとうございました。



出典：平野隆彰「穴太の石積み」
購入お問合せ先
穴太衆石積み研究所
電話：〇七七・五七八・〇一七〇